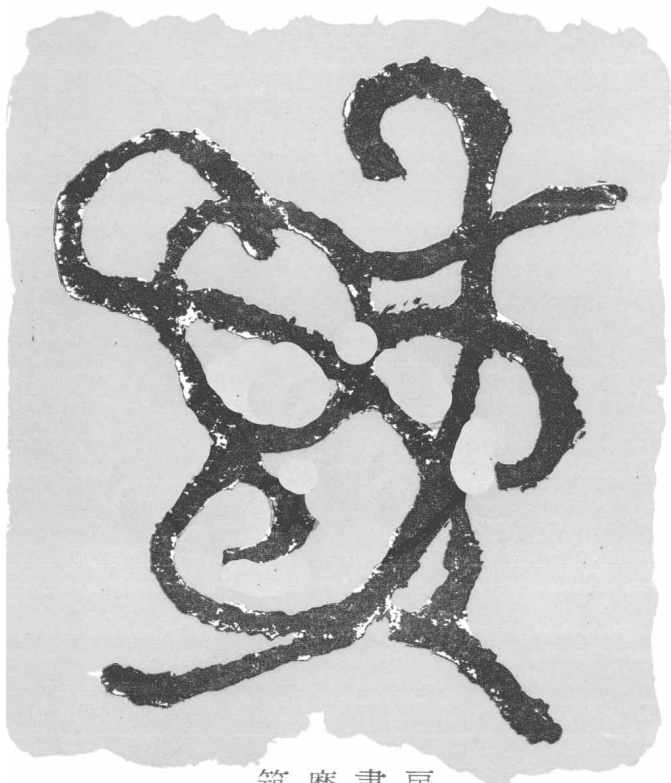


金 達 壽
故 国 の 人

筑摩書房版

人 国 の 故

金 達 壽



筑 摩 書 房



故国の人

昭和三十一年九月二十日 発行

定価



著者

金

達

壽

発行者

古田

晁

印刷者

長久保慶一

発行所

東京都千代田区神田小川町二ノ八
株式会社 筑摩書房
電話東京 四七六五一番(代表)
振替東京 一六五七六八

大日本印刷・鈴木製本

37619

目次

第一部 李印鐘の手記

5

第二部 千文桂の手記

71

第三部 続・李印鐘の手記

163

故
国
の
人

裝
幀

難
波
田
龍
起

第一部 李印鐘の手記

——私は、いったいどうして、あなたなどに向つてこの手紙をかく気になったか？ それはしばらく問わないでもらいたい。私にもいまはよくわからない。わからないからです。

それは、あるいはこの手紙・手記をかきおわたたときになるとわかるかも知れない。そして私はこの手記を、日本にあるあなたに向つておくるか、どうかをきめるだろう。

私はまだ、これをあなたにおくるとはきめていない。が、私はあなたに向つてこれをかく。いまは、とにかく、これだけのことにしておいてもらいたい。

しかしながら、私はこの手記をかきすすめる順序として、その動機のところぐらひは、まず、どうしても明らかにしなくてはならない。すればまた、この手記の内容もほぼ明らかになってくるかも知れない。

あなたは、人を殺したことがあるだろうか。殺さなくても、殺される人間の、そのときの気持ち、心持ちは考えてみたことがあるかも知れない。作家であるあなたは、きっとそれを考えてみたことがあるにちがいないと思う。

立木に自分の名を刻みつけ、掘られた穴の前に立たされて殺されるまえの五分、三分、二分、一分……ああ！ 何で、私はいま、こんなことをかきだしたのだろう。

だいいち、奴らを人間だなんて！

奴らは人間ではない。奴らこそはわが国のだに、わが国の独立と繁栄とを妨害し、破壊してきたものどもではないか！ 奴らは……、いや、待てよ。私はおちつかなくてはならない。これが動機、——そうだ、これが動機ではない。動機はこれではないのだ。

私があなたに向つてこれをかく動機は、そう、それはたまたま、あなたが私と故郷をおなじくしていたから、私とおなじ村で生れているからだ。このことを、私はかなりまえから知っていた。そして私は、かなり以前からあなを殺すことを考えていた。あなたは……。

いや、——こうしよう。まず、私は自分を紹介しましょう。しなければならぬ。誰に向つて話をするにしても、話しかける方から、まず自分を紹介しなくてはならない。それが礼儀というもののだ。ましてあなたは、私がいったい何ものであるのか、全然知らないだろうから。

私は、慶尚南道の一巡警で、名は李印鐘。巡警というのは、日本でいう巡査のことです。

生れたところはさつきいったとおりですが、あなたはおぼえているかどうか。——港町のM市からでている街道、あのアカシヤの並木道をずっとゆくと、間もなく私たちの生れたK村へのわかれ道に達し、そしてQ駅となるが、そのあいだにN面事務所があつて、そこにM警察署N支署がある。

支署というのはむかしの駐在所で、いまでも場所はおなじところにある。しかしこの支署は大支署で、主任は警衛(警部補)で徐剛という。私は、その定員十三人の部下のうちの一人として

勤務している。村の家からかよっているのではなく、いまはまた、M市の入口の方にある署の寮へもどって、そこから通勤している。

しかし、いまこれをかいているのはこの寮のなかではなく、家へかえってきてかいている。それは、ある事情からです。もっとも寮ではそういう事情がなくなると、とうていこういふかきものなどではしない。

あるときかぞえてみたが、私が生れたのは、あなたよりちようど九年おくれてだった。してみるとあなたはいまちようど三十七歳で、あなたのかいているものによると、十二歳であなたはこの村を離れて日本へ渡っているから、そのときはすでに私もこの村にいたのです。

つまり、わずかのあいだではあったけれども、あなたと私とはいっしょにこの村で、この肥料臭い、が、朝夕は澄明なおなじ空気を吸ってくらしていたのです。

私は、あなたの生れた家を知っている。それはやはり農家としていまも立っていて、私はいまでも外へとびだしてゆけば、すぐにそれを見出すことができる。いまは張範用というしみつたれた百姓が、そこに住んでいる。

ついでに、あなたの記憶にあるかどうか知れないが、念のために私の父の名をここにしろしておく。李広会という百姓です。私はその末子の三男であるが、私の家とあなたの家とはわりに仲よくしていたものらしく、母のことをばをかりれば「餅をつけば必ずわけあった」そうで、ほかの、村から日本へ渡っていったものとあわせて、父母たちはいまでも眼をしょぼつかせながら、「どうしているだろうか——。」とあなたたちのことを心配そうにうわさしている。子供のころのあなたのこともでる。

私はあなたのかいた二冊の本と、やはりあなたの文章がのっている五冊の日本の雑誌とをこの家にかくしてもっている。この、何も知らない文盲の父母たちといっしょに坐っていて、それを開いてみながらあなたのうわさをきくというのは、ちょっと奇妙な感じのものです。話してやりたいという誘惑を感じる。

が、私はがまんする。なぜなら、そうなれば、私はあなたのかいているこの恐るべき内容、思想をも話さなくてはならないからだ。しかも父と母とは、私が巡警となることを、「うしろ指をさされる」といつて反対し、いまでも折があれば「やめてくれ」といつている。

だいたい私の父や母をも含めて、この人々は、警察官というものになりたいして認識を欠いている。私はそう思う。いまだに旧帝時代のそれと混同している。まだ国家観念というものができていないからだ。私はそう信じている！

そのしようにこには、この村の連中でさえもいまでは私の顔をみるとものをいわなくなり、いつの間にかちりぢりにどこかへ消えていなくなってしまう。そればかりではない。父や母でさえも、このごろは、私の顔を何か怖れをもってみているようだ。毎日何を考えているのか、ただ黙々と働いている長兄の時鐘とは、すでに、口をきかなくなつてから久しい。

それにあの玉順の奴。……私は孤独だ。私は家族とも離れ、^{サラン}舍廊（客間）でいま一人これをかいている。一つはこの孤独感が、私をしてこれをかかせているのかも知れない。

私はいま、一人ではじっとしていることができない。何かに注意を集中しないではいられない。ようやくあの戦争もおわつたいま、私はよろこんでしかるべきなのに、いったい私はどうして、いつからこういうことになってしまったのか。

檀君紀元四二七八（一九四五）年、八月十五日。私はM商業学校の生徒だった。私は、M市で海産物問屋をやっていた叔父の家から、学校へかよっていた。叔父は私の次兄の贅鐘をつれてきて働かすことで、私をこの学校へ入れてくれた。妾腹からも子をえられなかった叔父は、さらに私をもその店で使うつもりであった。卒業したら、店のいっさいをまかせて、跡目をつがせるのだといていた。

その卒業を間近にした夏であったが、私たちは、M市の背後からN面にかけて牛の背のようにうねっているのでそうよばれている牛背山の山腹で、松根油のための、松根掘りをさせられていた。

私たちは真剣な顔つきをして、しかし、ふざけ半分にシャベルをおし込んだり、斧をふるったりしながら、ある一個所のみをみつめていた。そこは、崔任卓が私たちの群れからひそかに抜けて街へラジオをききに降りていったところで、彼はまたそこから戻ってくるはずであった。

ところが崔任卓は、背後のどこでもないところから姿をあらわした。彼は「もはや」というわけであつたらう、堂々と私たち全体が朝登ってきた山道から戻ってきたのだ。

「おーい、おーい！」崔任卓は私たちのみえるところまでくると、両手を万歳のかっこうにふり上げ、ふり上げて叫んだ。

私たちは、いっせいにふり向いた。

「そんなシャベルはすてろ！ ゲートルもとちまえ！ 暑い奴は日陰へ入って裸になれ！」

崔任卓は息せききって、一人で昂奮していた。

私たちは、もうそれですべてを知った。私は、朝からアナウンサーの悲痛な声で報じられていた、日本天皇の「重大放送」をすでにうすうすと感知してはいたが、それが現実のものとなったのを知ると、全身からすーっと力が抜けてゆくを感じ、何やら、瞬間ではあったが悲哀の情に包まれた。

が、それがその後にくるものすごい昂奮と新しい力との予知であったのだ。この四、五日とくに居丈高になって空元氣ばかりをだしていた監督の日本人教師たちは、早くもどこへいってしまったのか、姿を消していなくなっていた。

私たちはシャベルを投げすて、山腹の暑い陽ざかりの下で昂奮の渦を巻きおこした。何よりもまず私たちは、卒業とともに、あるいはそれ以前に迫られていた「志願兵」や徴兵からまぬがれたことがそのときはうれしかった。敵のために、その敵のために戦って死ななくともすんだのだ。あるものは何を思ったのか、カーキ色のシャツを脱ぎとって、歯で噛みきってびりつとびりつと引裂いていたり、松の太木に体当りできびつて、氣狂いのようにそれへよじ登ろうとしたりしていた。千文桂は、一人横の方へいって、声をおし殺して泣いていた。

私の生活はこの日、このときから一変した。私たちは、この日の夕方から学校を占領した。翌日からM市を中心に大デモンストレーションが連日つづけておこなわれ、人々はあるわけの声を張り上げて、「朝鮮独立万歳！」を叫んだ。私もはじめてそれを叫んだ。身内のしびれるような歓喜、私は生れてはじめて生きていることのようにこびを味わったといってもよかつた。日本人は一人のこらず、街から姿を消してしまっていた。

人々は抱きあつて踊り上ったり、はねたりした。おばあさんたちは街路に立つて、ただもう涙をながしながら、手をふつて私たちをみていた。いつの間につくつたのか、あるいはつくつてあつたのか、太極旗が人の手にあつて打ちふられ、赤旗がもちだされて人々の肩のうえで波打っていた。

私はわが国（ああ、このことば、日本人のみが使うことのできていたこのことばを私はどんなにうらやましがっていたことであらう！ はじめて使うことができたときの舌ざわり！）の国旗・太極旗をこのときはじめてみた。そしてあの忌わしい赤旗をも。……このときすでにわが朝鮮はよろこびとともに、その悲劇がはじまっていたのである。しかもその赤旗の方が、ずっと太極旗よりも多いのだ。

「おい、その赤旗は、共産主義の旗じゃないのか。」ある日、——その日は、M 刑務所の政治・思想犯の釈放を要求する示威であつた。

「共産主義の旗、そうかも知れない。それがどうした？」と崔任卓は、けわしい眼つきをしてこたえた。

私は黙つた。そしてさかのぼつて考えてみると、この日から、彼と私とは敵味方にわかれたのだつた。私は商業学校の生徒であつたが、二年のころから、文学書をよみはじめていた。主として日本語の翻訳をとおしてではあつたが、西欧の近代文学をよみあさり、アンドレ・ジイドの「ソヴェト旅行記」など、ことにその「修正」をよんでからは、一つの信念をかたちづくっていたようであつた。

「君は日本帝国主義を憎み、きらつていながら、そのおしえたものだけは忠実にまもうとい

うのか。」学校の教室へもどると、いきなり崔任卓は、そこへ坐れ、というふうにしめしていった。

「そんなことはないさ、それがどうしてそうなるんだ。」

「そうじゃないか。その反共・防共思想は日本帝国主義者どもがおしえのこしたもののじゃないか。われわれは、あの帝国主義者どもがのこしていったいっさいのものを、掃きだしてしまわなければならないんだ。それが独立だ。それがなくては独立はありえないのだ！」

崔任卓は、まじめになつて話しだすとすぐに青くなる質で、額のあたりからだんだんと色が變つてきはじめてきた。

「それはそうだ。しかし、それと同時に私たちは自由でなければならぬと思う。とくにおれたちのような後進民族にとっては、これは何よりもまず必要なことだ。個人々々がそこで自由に判断し、才能をのばし、開花させなければならない。そしておれたちはすみやかに、一日も早く失われたものを回復しなくてはならないんだ。それが本當の独立だとおれは思う。」

「自由とは、真の自由とはいつたい何だ！」崔任卓は、拳をふるって叫んだ。

私は、毎日のように、こうして崔任卓たちと議論をたかわしていた。それぞれ二十歳前後の私たちはこうした議論をたかかわすか、あるいは示威をするかの日常がつづいた。私たちは学校を本拠にして、街を日本人の破壊からまもるために、自治隊をつくつていた。

いま思えば、この議論をたかかわしているうちはまだよかつたのだ。それがじよじよに、ついに実力をもつて互に相たたかうこととなつたのである。

正直にいつて、このときの崔任卓との議論では、私の方がいくぶん分がわるかつたようであ

った。漁師の子でがっちりとして身体が大きく、何ごとにも積極的であつた彼に、私はまえからおされるものを感じていたからかも知れなかつた。それに日本帝国主義を憎むのあまり（と私は思う）、彼の方を支持するものが圧倒的に多かつた。私とはもつとも親しなかつた「秀才」の千文桂は、そういうときは終始黙つていたが、しかしどちらかというところ、彼も崔任卓の方に賛成のようであつた。しかし私は、自分の信ずるところに少しも変りはなかつた。

私は間もなく、單身、京城へ向つて出発した。まだ混乱時であつたから汽車はひどい満員で、私は貨物車のなかにつめ込まれたり、寒風のなかを走る汽車の屋根にへばりついたりして、三日目によく京城へついた。私は軍隊、国防軍に加わるつもりであつた。私は金日成の名を胸に抱きしめていた。このときまでの私は、金日成が共産主義者であるとは少しも知らなかつたのだつた。

まえには、私は、文学作家になることをひそかに考えたこともあつたが、解放後はそれを一擲した。そしてまえには「志願兵」や徴兵にとられることをあんなに恐れていたものであつたが、今度は、朝鮮のためなら、いつでもでもよろこんでたかい死ねると思つた。

私は崔任卓たちに、民族が、それぞれ自由に自己の才能をのばせるようにということを主張したが、それは何も私自身がそういう自由をえたいがためではなかつた。それを、保障するものがなくてはならない。それは力だ。それがなくては自由も何も、朝鮮はまた亡ぼされてしまう。私はその楯となるつもりであつた。

京城は、十二月末、折からモスクワ三相会議で決定された信託統治の反対でわきかえつてい

た。人々は「原子爆弾か、信託統治か？　なら原子爆弾を！」などといったプラカードをかかげて街を行進し、一夜づけの政党が入りみだれ、連日ひっきりなしに、あちこちで演説会や講演会が開かれていた。そのあいだを、闇屋などの物売りがひしめいていた。物価はこれらの闇屋たちのために、日に日にあがってゆくようであった。しかも彼らは、進駐のアメリカ軍の兵士とも街頭で取引をしたりして、民族の恥をさらしていた。乞食もまだうようよしていた。

私の目ざす軍隊、国防軍はどこにあるか皆目わからなかった。わからないのではなくて、それはまだかたちをなしていなかった。朝鮮は、生れいずるもののはげしい陣痛を苦しんでいて、しかもそれはまた、ここでも、私のみるところではやはりそのもつとも大きな障害は共産主義者「赤」であった。赤旗は、いっそう多くみうけられた。

私は、出発までは、あるいはまた汽車のなかなどででも、金日成は京城へかえってきているときいていたが、彼はソ連軍に占領されて「赤」の地帯として区切られた三十八度線の向うの平壤にいらしく、一度もまだこちらへはきたことはないとのことだった。そして、彼はソ連のかいらいとしての偽物で、本物の金日成は、すでに日本関東軍とのたたかいで戦死をしているとのことだった。また、病死をしているともいわれた。

当時の私にとって、このはなしは私の氣にいった。金日成が、共産主義者であったからである。彼が共産主義者「赤」でなかったならば、私はおそらくこれを信じなかったのにちがいない。私は、今度の戦争がはじまるまで、これを固く信じて疑わなかった。

いつのころからか、抗日バルチザンの果敢な将としてその名が胸に刻み込まれていた金日成が、いまは死んでいないということはさびしく悲しいことであったが、しかし死んでいないも